
やっぱり、寂しかった

ありまうたこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やっぱり、寂しかった

【Nコード】

N2398T

【作者名】

ありまうたこ

【あらすじ】

私たちはまた恋をする

(短編作品集です)

やっぱり、寂しかった(前書き)

「やっぱり、寂しかった」

なんてことを言ったら

あなたはどんな反応をするだろう

やっぱり、寂しかった

もう春が近付いて来ているはずなのに、雪は生き残りを掛けたサバイバルゲームをしているかのようにしぶとく地面に残り、春を待ち侘びる虫をも呆れさせるほど外は寒気に包まれていた。

私はストーブの火を付けて、その前で膝を抱えて丸くなった。

ピカピカに磨かれたフローリングにぽつりと置かれた一つの大きな段ボールに背を向けて、私は膝を抱えて丸くなった。

そこは前に住んでいたワンルールの部屋よりも随分大きな1DKの部屋だった。そこに私はこれから一人で暮らす。

前に住んでいたワンルールの部屋には、私とあともう一人男が住んでいた。それは紛れも無く私の恋人だった。

だんだん温かくなってきた体を小さく擦り、目の前でジリジリと燃える炎の中に前に一緒に暮らしていた前田遼平の姿が見えた気がした。

前田遼平とは3年近く恋人同士であって、その3年の内、後半1年半は同じ屋根の下で過ごした。

たまたま大学のサークルが一緒に、たまたまその始めの自己紹介の時に私が好きだと言ったアーティストと彼が好きアーティストが一緒だったっただけで仲良くなって、そしていつの間にか恋人同士になっていた。

私も彼も口数が少なく、あまり喧嘩もしなかったし、もしかしたら会話すらも数えるくらいしかしていなかったかもしれない。

だけど、彼と一緒に居れば不思議と安心できたし、私は彼のそばに居る度に彼を愛しく思った。

きっと彼もそうだったのだと思う（そうであって欲しい）。

休みの日には近くの公園に住み着いている野良猫と戯れたり、その野良猫に名前も付けたこともあった。

野良猫は綺麗な灰色の体で毛並みも柔らかかで一緒に居て心地好かった。

そんな野良猫と戯れる私の姿をカメラ好きの彼はパシャパシャと写真に収めていた。

その写真を現像する度に、私の目が半開きだとか猫にしかピントが合っていないだとか、くだらない文句で穏やかに笑い合った。

大学では静かに過ごし、お昼に中庭のベンチに座ってご飯を食べたりうたた寝をしたりした。

久しぶりに学食でご飯を食べたとき、サークルの仲間と同じテーブルで、その内の自慢話好きの新井達哉の自慢話を永遠に聞かされてうんざりした気分になり、もう学食では食べないと帰り道で誓い合ったりもした。

そうやって、私たちはのんびりと時をお互いの記憶に刻み込んできた。

そんな彼と別れてまだ1日しか経っていないかった。あの小さくて狭いワンルームの部屋から必要な物だけを詰め込んだ大きな段ボールを抱えて、この広くて真新しい1DKの部屋に逃げ込んでからまだ1日しか。

そんな今でも、この広くて真新しい1DKの部屋は空っぽ状態で、ぽつりと虚しく閉ざされた大きな段ボールと小さなストープと私の体があるだけだった。

何も食べずにただ茫然と座り込み、小さなストープの前で小さな体をさらに小さく折り畳んでいた。

だけどさすがにもうキツくなってきた私のお腹がSOSのベルを鳴らしていた。

私は渋々立ち上がり、閉ざされた段ボールのガムテープをダラダラと剥がし、中から財布とキーケースを取り出した。

そして履いているジーンズのポケットから新しいこの部屋の鍵を取り出し、キーケースに付けようとキーケースのボタンを開けた。キーケースの中には3つの鍵が付けられていて、お互いを主張するようにぶつかり合いながら揺れていた。

私は一つ目の金具から自転車の鍵を取り、自転車を駐輪場から出した。

その上にまたがり、1DKの部屋が12部屋ある3階建ての鉄筋コンクリートのマンションの前の坂を下った。

坂の下りに勢いがつく自転車のブレーキを小さくかけながら駆け下りた。

この坂を下った直ぐのところに、コンビニがある。

コンビニの前に自転車を停めて、私は空を見上げた。

オレンジ色の街灯がポツポツと灯りを灯し始めていた。

青紫色に染まつた空にもポツポツと灯りを灯す星が見えていた。

まだ寒い空気を吸い込み、着ていたダウンのボタンを1番上まで閉めてから私はコンビニのドアを開けた。

むわんと暖かい空気が私に纏わりつく。私は少し咳払いをした。

それから帰ったら部屋は寒いんだろうな、なんてことを思った。

私は鮭のおにぎりとカップラーメンを買って帰った。

帰り道の坂は当たり前に行きとは逆の上り坂で、私は歩きながら自転車を押して帰った。

まだまだ外は寒いのに、私は額に微かな湿り気を感じた。

夏になったらこの坂を上るのは大変だろうな、と私は息切れをしなから思っていた。

やっとの思いで1DKの部屋が12部屋ある3階建ての鉄筋コンクリートのマンションの前に辿り着き、私は自転車を駐輪場に停めて鍵をかけた。

鍵は、キーケースの一つ目の金具に取り付けた。

まだ微かに白く残る息を吐き出しながら、私は2階の階段を昇った

らすぐの部屋の鍵を開けた。
思った通りにしんとした部屋は寒かった。

冷たいフロアリングの上をペタペタと裸足で歩き、私は小さなストーブの火を付けた。

少しだけその前で膝を抱えて丸くなった後で、私は気付いた。ポットもやかんも鍋も持って来ていない事に。

私は食べることの出来ないカップラーメンを横目に鮭のおにぎりだけを頬張った。

見つめるストーブの炎の中には、また前田遼平の姿が見えた。

ゆらゆらと揺れる彼の姿は小さな空気に揺らめく炎のせいではなくて、微かに溜まった私の目の奥に潜む悲しみのせいだと気が付くのに、そう時間はかからなかった。

私はまだ彼が好きなのに、別れを選んだのは何故だったっけなと1日では到底癒すことの出来ない深い穴に、私はまた悲しみと孤独を流し込んでいった。

そんなことをしても、寂しさが増えるだけだと知ってはいたが、今の私にはそれくらいしか出来なかった。

小さなため息と共に、魂が抜けてしまったかのように私は小さなストーブの火を見つめながら眠りについた。

目が醒めると、目の前にはまだジリジリとストーブの炎が燃え盛っていた。

私は少し冷えた体を無理やりお越し、うんと伸びをした。

ストーブのせいで空気は乾燥し、私はうまく咳払いをすることもできなくらいに喉を痛めていた。

窓からは淡い太陽の光が射し込んでいて、今何時なのだろうと私は辺りを見渡した。

当たり前にまだ壁には時計など掛かってはいなくて、私は段ボールの中から携帯電話を探した。

適当に詰め込んだ洋服や、前田遼平と色違いで買ったピンクのマグカップや、お気に入りの本や、趣味で絵を描いていたスケッチブックなんか次々と冷たいフローリングに投げ出されていく中で、私は携帯電話を見付けることが出来なかった。

頭をフルに回転させて、あの小さなワンルールの部屋を私は思い出した。

その小さなワンルールの部屋には充電器に繋がれた私の薄いピンク色の携帯電話がベッドの上に置かれていた。

私は面倒くさそうに頭を掻いてこれからどうしようかを考えた。

前田遼平と連絡を取って携帯を返してもらうにしても、携帯が無いから連絡も取れない。

今が何時なのかもわからないまま私はただ茫然と座り込んでいた。

「面倒くさくなつたなあ……」

私はまた頭を掻いてこれからどうしようかを考えた。

新しい携帯を買うか……でも今の携帯に入ったデータを失うのはさすがに嫌だ。

考えても考えても良い方法は見つからなかった。

私は近くに投げ捨てていたキーケースをちやりちやり触りながら、込み上げる苛立ちを抑えていた。

ふと私は触っていたキーケースに目をやった。

そこにはお互いが主張し合うようにぶつかる四つの鍵があった。

一つ目の金具に取り付けられた自転車の鍵。

二つ目の金具に取り付けられた実家の鍵。

三つ目の金具に取り付けられた小さなワンルームの部屋の鍵。

四つ目の金具に取り付けられた真新しい1DKの部屋の鍵。

革の生地に小さな花柄の模様が付いたお気に入りのキーケース。

今思えば、このキーケースは前田遼平がプレゼントしてくれたものだった。

私は物を直ぐ失くす癖があつて、細々としたものは特に失くす確率が高かつた。

そんな私のために前田遼平が買ってくれたのがこの小花柄のキーケースだった。

それは私の好きなブランドのオリジナルキーケースで、多分、とても高かつたと思う。

そんなキーケースを見つめながら私はこんなことを考え付いた。

このキーケースに付けられた三つ目の鍵を使って、前田遼平の家に忍び込もう、と。

私はそれから急いで投げ出された荷物の中からスケッチブックと鉛筆を掘り出した。

スケッチブックの中には、前田遼平と一緒に戯れて遊んだあの公園の野良猫の絵や、カメラを構える前田遼平の絵や、あの小さなワンルームの部屋で前田遼平と大事に育てたサボテンの絵や、そのスケッチブックの中には前田遼平との思い出が詰まっていた。

切なさにぼつかりと空いた穴が大きくなる心をきゅつと握りしめ、私はスケッチブックの白紙のページに今日1日の計画を書き始めた。前田遼平が住む、あの小さなワンルームの部屋の壁に掛けられたカレンダーには、確か今日はバイトと予定が入っていたはずだった。

私は鮮明にそのカレンダーに書かれた彼の繊細な文字を思い出した。「バイト 13時～17時まで」前田遼平の繊細な文字は私の大好きなキャラクターのカレンダーにはつきりと書かれていた。

前田遼平はそのキャラクターが好きでは無かったが、私が駄々をこねて買ってもらったのだ。

私はまだそのカレンダーはあの小さなワンルームの部屋の壁に掛けられているのだろうかと思った。

そして、まだ掛けられてればいいなあなんてことも思ってしまっていた。

一通り今日の計画を書いた後、スケッチブックのそのページを破いて、6つ折りにしてジーンズのポケットに入れた。

それから今の自分の格好をもう一度確認して、何を思ったのか、私は前田遼平が好きだった洋服に着替えることにした。

別に彼に会いに行くわけでもないのに、むしろ彼に会わないように行かなくてはいけないのに、私はただなんとなく、前田遼平が好き

だった洋服に着替えたのだった。

それは淡いピンクのワンピースで、どこか春を感じさせるような色合いだった。

それから私は部屋を出て、自転車にまたがり坂を下りた。

時計が無いので時間がわからない私はコンビ二で13時になるまで時間を潰すことにしたのだ。

私はまだ寒い空気に春色のワンピースで体当たりをした。

パタパタと風になびく春色のワンピースは雪に迷い込んだ春を探していた。

自転車を停めて、私はコンビ二へ入っていった。

意外にも時間はもう12時を過ぎた頃で、私は適当に雑誌を手にとって見ていた。

手に取ったファッション雑誌の中には前田遼平が好きそうな服がチラホラ載っていて、それを見るたびに私の胸がきゅんとした。

この服を私が着たら前田遼平はなんて言うのだろう。

似合わないのに無理するなよ、なんてあの頃と変わらない表情で言うのかな。

なんだかそんなことを思っているのが馬鹿らしくなってきた私は、雑誌を棚に戻してお菓子コーナーへと向かった。

お菓子コーナーの棚の1番下の段にある駄菓子を見ていたら、また前田遼平の顔が浮かんだ。

私たちは駄菓子がとても好きで、よく近くの駄菓子屋さんで買ったっけななんてことを思い出してまた胸がきゅんとした。

前田遼平から離れるために今この街に逃げ込んで来たのに、私が持

ってきた持ち物にも、たまたま逃げ込んだ街にあるコンビ二にも、前田遼平を思い出す品がたくさんある。

別れとは所詮そんな物なのだろうか。

私は頭を掻いてコンビ二を出た。

コンビニの自動ドアの前でちらりと見た時計がカチカチと刻む時間はまだ12時半くらいだった。

私は自転車にまたがって今度は駅へと向かった。

駅までは多分5分くらいで着くと思う。どうせなら駅に近い方が良いと、私はあの1DKの部屋が12部屋ある3階建ての鉄筋コンクリートのマンションを選んだのだから。

雪解けで濡れた歩道を自転車で走る。冷たい空気を体全体に感じて私は少しだけ身震いをした。

まだ見慣れない景色を自転車の上から眺めた。

大きなデパートや本屋や大学もあるこの街の雰囲気、私は早く飲み込まれてしまいたかった。

駅の駐輪場に着いて、私は自転車を降りて鍵をかけた。その鍵はお気に入りのキーケースの一つ目の金具にまた取り付けた。

駅に入り切符を買う。

前田遼平が住むあの小さなワンルームの部屋は、私が今いる街から3つ目の駅を降りた所にある。

私は3つ目の駅までの切符を買って改札をくぐり抜けた。

電車の中は思ったよりも空いていて、私は窓側の席に迷わず座った。1人で大きな段ボールを抱えて電車に乗ったあの時も、この辺りの窓側の席に座って、こつこつと窓からの景色を見ていたっけ。

微かに窓に写る私の表情がなんだか泣きそうで、私は慌てて窓から視線を逸らした。

それから私はあるはずのないワンピースのポケットを探した。

「あつ…」

口をぽかんと開け、しまったと思った。

今日1日の計画を書いたあのスケッチブックの切れ端を、私は最初履いていたジーンズのポケットに入れたままにしてしまっていたのだ。

あの時、スケッチブックに何を書いたんだっけなと私は頭をうんと悩ませた。

「まあいいか…」

私は微かに呟いて、また窓からの景色に目をやった。

まだ寒い景色の中にも、迷い込んだ春が見えた。

春色のワンピースを着ていたら、なんだか春を探しに来た子どもみたいな気分になって、私は少しわくわくした。

3つ目の駅に着いて、私は電車を降りた。

この駅から南にずっと歩いて行くと、前田遼平が住んでいるあの小さなワンルームの部屋があるアパートに着く。

駅を出る前に見た時計は13時10分を指していた。

予定では、前田遼平は今バイト中だ。

前田遼平は写真屋でバイトをしている。

写真の現像を行ったり、証明写真を撮るのが彼の仕事らしい。カメラ好きの彼には幸せなバイトなのだろう。

私は何度か前田遼平のバイト先に出向いたことがあった。

その写真屋の近くには小学校があつて、その小学生たちに「写真屋の兄ちゃん」なんて呼ばれて、はにかんでいたっけ。

私はくすくすと思い出し笑いをしながら、ゆっくりと南へ歩いて行った。

冬のような春のような太陽の陽射しが私をジリジリと照らしていて、私は思わず目を細めながら街の景色を見渡した。

駅から直ぐ近くにあるこのコンビニも、あの木の陰に隠れた喫茶店にも、あの今にも崩れそうな駄菓子屋にも、私は前田遼平とよく来ていた。

そんな2人の思い出が詰まったこの街に、また足を踏み入れるなんて思つてもいなかったから、私は少し変な気持ちになつた。

南に突き進んで行く内に街中から少し外れて住宅街が見えてくる。

大きな家や、古びた下宿アパートや、小さな公園に混ざつて、私が以前、前田遼平と住んでいたあのワンルールの部屋のアパートがある。

クリーム色の壁に、錆付いた螺旋階段のそのアパートは、ほんの1日前まで私と前田遼平のお城だつた。今はもう、違うのだけど。

私は見慣れすぎたその住宅街をゆっくりと見上げながら歩く。

この大きな家の出窓には置物のようにピッタリと止まったままこちらの様子を伺う猫がいたなあとか、この下宿アパートの大家さんに何故かたくさんのお菓子を貰つたことがあつたなあなんてことを、まるで1年くらい前の出来事のように思い返した。

そして私は小さな一軒家の隣に建つ、私と前田遼平のお城だつた小さなクリーム色の壁のアパートに辿り着いた。

今までそんなに感じたことは無かったけれど、私が逃げ込んだマンションが大きかったせい、このアパートがやけに小さく見えた。そんなアパートの小ささに比例しない私の心臓は大きく高鳴っていた。

緊張と嬉しさと興奮が混ざったような感覚に私は少し吐きそうになった。

2階建てのそのアパートの錆付いた螺旋階段を1段1段ゆっくりと上った。

1段上がる度に、私は目の裏に熱いものを感じた。きつと興奮しているのだろう、と思った。

私と前田遼平のお城だった部屋に着き、私は辺りを見渡した。1日前まで、私はこのアパートの住人だった。きつと誰も私を泥棒だなんて思わないだろう。

だけど私は、なんだか自分が泥棒になってしまったような気分になった。さつきよりもずっと、心臓が忙しく動いていた。

私は小さく深呼吸をして、お気に入りの小花柄のキーケースの三つ目の金具からこのアパートの鍵を外した。

震える手に、しっかりとその鍵を握り、鍵穴にそれを差し込んだ。こんな挙動不審に鍵を開けている姿を誰かに見られたら、私は泥棒だと勘違いされてしまうかもしれないと思った私は、不安に染まる心よりも早く、震えるその手を動かした。

鍵穴は、まるで私を待っていたかのようにすんなりと私の鍵を受け入れた。

私はホッとして腰が抜けそうになったが、それを堪えて部屋のドアを開け、中へ入って行った。

部屋の中に入ると、ふわりと前田遼平の匂いがした。きれいに揃えられた彼の靴たちの横に、同じようにきれいに揃えて自分の靴を置いた。

ギシギシと小さく軋む床を歩き、部屋の中を見渡す。

そこは、私が飛び出したあの日と、何ひとつとして変わってはいなかった。

私が置いていったテイベアも、前田遼平と2人で集めたマンガも、私が駄々をこねて買って貰ったキラクターのカレンダーも、大事に育てていたサボテンも、全部そのままだった。

前田遼平の姿は、当たり前前にそこには無かったけれど、おかえりいつもの優しい顔で言ってくれてるみたいにして、さっきから熱かった目の奥から込み上げる何かを、私は止めることが出来なかった。

目から溢れ出る暖かい何かのせいで、前田遼平が好きなのか？と思わず私は自分に問い掛けた。

答えがない訳ではないし、答えを迷っている訳でもない。

しかし、前田遼平との別れを最初に切り出したのは、私だった。

私がまだこのワンルームに住んでいた頃と同じようにガラスのミニテーブルの上に置かれているティッシュを私は3枚ほど手に取って、目から溢れるものを拭いた。

それから私は、目的を見失う前に薄いピンク色の携帯電話を探し始めた。

最後に見たのは、充電器に繋がれてベッドの上に置いてある時だ。しかし、もうすでにベッドの上には薄いピンク色の携帯電話の姿はなかった。

姿の見えない携帯電話を、私は少し焦りながら探した。

クローゼットの中、引き出しの中、タンスの中、ゴミ箱の中…まるで本物の泥棒になったように、私は夢中でワンルームの部屋をあさった。

あちこち探している内に、出てくる思い出の品。2人で写っている写真とか、色違いで買った前田遼平用の紫色のマグカップとか、一緒に集めたマンガとか、私が居た頃と何も変わりのない風景に、やっぱりまた涙が出た。

滲む目線の先には、テレビの横に置かれたくまの絵の描かれたマグカップの中に入っている薄いピンク色の携帯電話が見えた。

このマグカップは、私がいつも携帯電話を入れていたマグカップだ。さらに滲む目線の先に、ガラスのミニテーブルの上にココアの入った色違いのマグカップを置いて、並んでテレビを見る前田遼平と私の姿が見えた。

「ホワイトタイガーの赤ちゃんだっ〜行きたいね、動物園」

「そうだね〜俺は爬虫類コーナーに行きたいよ」

「うげ〜あたし無理〜」

「なんでよ、可愛いじゃん」

「信じらんないわ」

「まあ、いいけど。あ、携帯鳴ってますよお嬢さん」

「ん〜取っ〜届かない〜」

「ったく…あー！」

「ココアこぼしたー！」

「わっわっあっちい」

「楽しんで取るうとするから〜あははははは」

「だったらお前が取れよ」ははははは

ばかー お前のがばかー

あほー お前のがあほー

でもすきー 俺もすきー

壁に掛けられた私の好きなキャラクターのカレンダーの今日の日付に、前田遼平の字で「バイト13時〜17時まで」の書き込みを確認した後で私は時計に目をやった。

シンプルな時計は16時45分を指していた。

私は綺麗に揃えておいた靴を履き、左手に薄いピンク色の携帯電話を握って、右手で前田遼平が住むワンルールの部屋に鍵をかけた。

前田遼平が住むワンルールの部屋のアパートの近くにはなかよし公園と言う小さな公園がある。

私たちはよくそこで一緒に時を刻んだ。

太陽が西の空に移動して、私を違う角度から見ている。

太陽のオレンジ色と近づく闇の紫色が混ざって変な色になった空を、私は小さなブランコに乗って見ている。

軋むブランコの隣には小さな茂みがあつて、そこには前田遼平と私が可愛がっていた野良猫が住み付いている。

「ブルー……」

小さな公園に私の小さな声が微かに響いた。

私の声が響いた先に、ブルーの姿があつた。

ブルーと言う名前は、前田遼平と一緒に付けた。毛が青っぽい灰色だったから。

ブルーは人懐っこいオス猫で、前田遼平と私はよく近くのスーパーで餌を買って、この公園に立ち寄っていた。

ブルーは私たちのことをずっと見てきた。

きつと誰よりも私たちのことを見てきたんだと思う。

そう思ったら、今こうやって寄り寄ってくるブルーの顔を見ることができなかつた。

「ブルー、私たち離ればなれにちゃったよ」

ブルーは何も言わずに私に擦り寄り続けた。

辺りはもうすっかり紫色に包まれて、空には闇が迫っていた。

私はなかよし公園のブランコの横の茂みに腰を下ろしてブルーを撫でていた。

こうやって居ると、まるでいつもの日常のように時が流れているみたいに感じた。

今うしろを振り向けば、猫缶が入ったスーパーの袋を下げた前田遼平が、ただいまって笑っているような気がした。

私は目を閉じて耳を澄ませた。

だけど、そんな耳に入ってくるのは、遠くで吠える犬の声とか、電車の踏切の音とか、子供たちの笑い声とか、車の音とか、近くで騒めく木々の揺れる音ばかりで、前田遼平の足音や気配を感じることはできなかつた。

「ブルー、またね」

私は立ち上がってブルーに別れを告げた。

またね、なんて、次はいつ逢えるのだろうか。

古びた下宿アパートや、大きな家を眺めながら、紫色の空の下を歩いた。

少しだけ肌寒く、私は小さく息を吐いた。その色は辛うじて白くはならなかつた。

わざと前田遼平がバイトをしている写真屋の前を覗き込むように歩き、駅まで向かった。写真屋には前田遼平の姿は当たり前になかつた。

電車の中は仕事終わりのOLや、サラリーマン、女子高生やなんやで溢れていて、私はドアの近くにもたれて外を眺めていた。

近くに居た女子高生の会話が耳に入ってくる。短いスカートをギリギリに揺らして、彼女たちは若さと明るさで満ちていた。

「今日だね〜最終回！あれ、最後どうなると思う〜？」

「より戻して終わりじゃん？」

「え〜つまんな〜い」

「でもそうゆう終わり方の方がいいよ。変に誰か違う人と付き合ったりするよりもずっといい」

「なんで〜?」

「私たちだつて一緒だよ。疲れたとか、詰まらないとか、飽きたなんて理由で簡単に人との繋がりを断っちゃダメな気がする。もっと大事にしなきゃ、人との繋がりをさ」

「ミカ大人〜……………」

私が住んでいる駅で降りたのは、きっと沢山いたんだろうけど、それはまるで私一人だけのような気がした。

家に着いた頃にはもう空は闇に包まれて居て、私は途中コンビニで買ったお弁当を床に広げて食べた。

携帯電話には何件かのメールと着信が入っていた。

お弁当を食べ終わって、床に寝転がりながらテレビの電源を付けた。適当に付けたチャンネルでは恋愛ドラマがやっていて、ずっと付き合っていた仲良しの恋人が別れ、それぞれ違う道を歩み始めるのだけど、日が建つにつれてお互いの大切さに改めて気付く、と言うような内容のドラマだった。

「ミカちゃん…」

私はふとあの電車に居た女子高生の事を思い出した。

疲れたとか、詰まらないとか、飽きたなんて理由で簡単に人との繋がりを断っちゃダメな気がする。もっと大事にしなきゃ、人との繋がりをさ。

最終回だったドラマは、ミカちゃんが予想していた通りに、二人はよりを戻して終わっていった。

悔しさや寂しさや切なさが込み上げてきて、少しだけ涙が出た。

そして少しだけ前田遼平のことを思い出した。

思い出して、すぐに掻き消して目を閉じて眠った。

私は前田遼平のことがとても好きだった。

前田遼平と別れてまだ全然時が経っていないのに、私の心は空洞化して冷たい空気が通り抜けて寒い。

私は前田遼平のことがとても好きなのだ。

前田遼平も今こんなことを思っていてくれたらいいな、なんてことを考えて私は思い出した彼の残像を蘇らせないように空洞化した心

から追い出した。
すきだったんだ、と自分に言い聞かせながら。

朝、電話の音で目が醒めた。着信メロディが静かな1DKの部屋に響きわたる。

私はくつついた目を無理やりこじ開けながら携帯を探して電話に出た。

「もしもし？すみれか？」

電話越しに聞こえたのは友人であるそうちゃんの声だった。

「お前昨日あいつんち行ったんだって？あいつが言ってたよ〜すみれが一瞬帰ってきた、って！」

心臓がびくんとなって空洞化した心が穴を縮めて元に戻っていくような感覚になった。

あいつとはきつと、あいつのことだ。

「なんだかんだ言ってさ、お前らまだ好き同士なんだろ？さっさとより戻しちまえよな〜」

そうちゃんはいつものノリでそう言った。私はそうちゃんのことがあんまり好きではなかったけれど、今日はなんだかホツとした。

私は「ありがとう、そうちゃんも奏恵ちゃんと仲良くね」そう言っ
て電話を切った。

私はお気に入りの服に着替えて、お気に入りのあのキーケースを持って家を飛び出した。

こんなことするつもりなんて無かったはずなのに、なんでだろう、
気が付いたら、そうしたいと思っていた。

キーケースから自転車の鍵を外して、私は勢い良くペダルを踏んだ。勢い良く走り出す自転車は軽快なスピードで坂を下って行く。

白いワンピースがパタパタと風になびく感覚がなんだか照れくさかった。

坂を下りてすぐのコンビニにも立ち寄らずに、街を駆け抜けて駅へ向かう。

昨日はあんなにゆっくり進んだ道を今日は急いで進んで行った。

街が私から離れて行っているのか、私が街から離れて行っているのか分からなくなるくらいにスピードで、額に湿る汗を拭いながら私を乗せた自転車は走っていた。

自転車のカゴの中で暴れるキーケースと財布が急げって私に叫んでいた。ような気がした。

駅に着いて、私は自転車の鍵も掛けずに切符を買って改札をくぐり抜けた。

ホームには出勤中のサラリーマンや学生とかたくさん居たような気がしたけど、私はそんなことも気にせずにはホームから線路に顔を乗り出しながらなかなか来ない電車を待っていた。

どんな気持ちか私にこんなことをさせているのか、私には分からなかったけど、このときはただ、ミカちゃんあの言葉や、そうちゃんのいつものノリで言うあの言葉が頭から離れなかった。

やっと来た電車に子供のように一番乗りで乗車した。

目的の駅に着いたら、すぐに降りられるように私はその駅で開くドアの前に立っていた。

流れる街並みを目で追っていると、薄らと明るく透明な窓に写る自

分の姿が見えた。

額には汗をかいていて、髪の毛もぺったりとしていた。

そんな化粧もしていない私の顔は、なんだか化粧をしているときよりも可愛く見えて、少し笑いそうになった。

二つの駅を越えて、私は電車を飛び出して改札を抜けた。

南の方向へ走って行く私は、昨日見たドラマのヒロインのようだった。

なんとなく一緒に居る意味がわからなくなって、お互い別にお互いを必要としないんじゃないか、なんて思ったら止まらなくなって、別れよって言ったらうんいいよって言われて、やっぱり必要ないんだなんて確信して、でも心は満たされるどころが空っぽになっていった。

たった1日の私の別れに私はさよならしたかった。

私は前田遼平のことがとてもすきみたいだ。

住宅街を駆け抜けて、なかよし公園の前で私は足を止めた。

そこにはゴロゴロ懐くブルーをしゃがみながら撫でている、くしゃくしゃのパーマがかかった髪の毛にひよろつとした身体の前田遼平の姿があった。

息を切らしながら、私は前田遼平に近付いて行った。

心臓が死んでしまいそうなくらいの早さで動いていて、それは走ってきたせいなのか、前田遼平のせいなのか、分からないくらいだった。

ゴロゴロと前田遼平に懐いていたブルーが、私に気付いてこちらへ歩み寄ってきた。

後ろを振り向く前田遼平は当たり前前だけ前田遼平そのもので、私はこの心臓の高鳴りは前田遼平のせいだなと確信した。

前田遼平は何か言いたげだったが、前田遼平が口を開く前に、私は口を開いた。

「やっぱり、寂しかった」

少し間をあけてから、前田遼平はいつもの笑顔で私を手招きした。
私は、そんな前田遼平のことがとてもすきみたいだ。

かくれんぼ恋愛(前書き)

あなたは知らない人

だけどわたしの好きな人

かくれんぼ恋愛

春は出逢いの季節。

周りはどんと新しい恋を始めて、そして付き合って、そして幸せそうで…。

大学生活を満喫中の私に足りないものは恋だった。

この大学にもう2年も通っているのに、私はまだ良いなあと思う人に出逢えていない。

いつになったら出逢えるんだろう。

むしろ恋をしている人たちはどうやってその人と出逢っているんだろう。

同じ学部？同じサークル？同じバイト先？

それとも、一目惚れ？

「きらら〜！これー忘れてったでしょー！」

「あーどつりで時間わかんなかったわけだ！」

「本当にきららってどこか抜けてるよね〜」

「抜けてないよ〜ちよっと忘れっぽいだけですー」

「それを抜けてるって言うのー、姉ちゃんを見習いなさい」

「そんなにえばったって、姉ちゃんとか言ってたって、説得力ないんだからーあ」

私の名前はきらら。そして私のお姉ちゃんの名前はうらら。うららにきらら。

お姉ちゃんには「うらちゃん」って呼び名があるけど、私にはそんな呼び名はない。

だからちよつぴりうらちゃんがうらやましい。

「うらちゃんー！次5階だよー！階段がつつり上るよー！急いでー」

「はーあい！」

「俊ちゃんまた格好良くなったー？」

「俊ちゃんはいつでも格好良いですーう」

俊ちゃんはうらちゃんの彼氏。

高校2年生の頃から付き合ってるからもう付き合って4年になる。

「じゃあね！時計、なくすんじゃないよ？」

「なくさないし、もう忘れないよ！」

うらちゃんは笑いながら俊ちゃんのところへ行った。

うらちゃんと俊ちゃんは仲良しで、そしてお似合いで、私はそんな二人に憧れていた。

私もいつか、あんな風な恋人同士になりたいなあ……って。

「あつ！きららこんなとこに居たのー？」

「あ、明日香」

「早くしないと2講目始まるよー？」

「ごめんごめん、急ぎっ！」

見慣れた大学の景色。

一方的に知っている誰か、と、一方的に知られている誰か。そんな曖昧な関係の場所に私は2年通っている。

「そついえば、さつきチラッと見えたけど、あれが例のうらちゃん？」

「そー！うらちゃん！」

「本当にそつくりなんだねえ！」

「そりゃあ、一卵性だもの」

「でも彼氏はうらちゃんの勝ちだね」

「それは禁句でしょー！！」

そう、私とうらちゃんは一卵性の双子。

うらちゃんの方が私よりも10分お姉さん。

小さい頃からうらちゃんはしつかり者で、私はだらだら怠け者。

同じ顔で同じ背丈で同じような人間なのに、性格はまるっきり正反対かのように違った。

「うらちゃんはしつかり者なのに、どうしてきららちゃんはこんなに怠け者なのかしらあ」

お母さんは口癖のようにこの言葉を吐き続けた。

別になんとも思わなかったけど、私が怠け者になったきつかけのつはお母さんのこの口癖のせいだったのかもしれない。

しつかり者のうらちゃんは人気者でモテモテで、4年も付き合っている彼氏がいて、今でもラブラブで仲良しで…。

ただど怠け者の私はバカ扱いされて、彼氏なんて全然できなくて、むしろ好きな人なんかもないくて、告白なんかもされないし、仲の良い男子もたいしていないし…。

どうしてこんなにも、うらちゃんと私は違うんだろうか？

「あ！ねえ聞いてー！この間言ってたサークルの先輩のアド、ゲツトしちゃったさー！」

「本当にー！？うっそ、すごいじゃん！」

「でしょー！めっちゃ嬉しいー！」

「いいなあ…私も恋したいなあー」
「大学なんて格好良い人ごろごろ居るじゃん」
「違うのー！なんかこう、私にぴったりの人ってというか、私のすきなタイプぴったりの人が現れてくれないとねえ」
「いるんじゃない？大学なんてたくさん男いるんだし」
「そうだよねえ…なんで見つからないんだらうねえ」
「もっと周り観察しなくちゃねえ」
「そうだねえ」

明日香は同じサークルの2つ上の先輩に恋をしている。
もうそのサークルに入って2年も経つのに、その先輩に恋をしたのはつい最近で、なんだかそういう人とのつながりとか、人間の感情の変化ってなんだかやっぱり不思議だなって思った。

2 講目、少しだけいつもよりも周りを見るようにして講義を受けた。同じ学部のはずなのに、何百人も生徒が居るせいで、まだ全然知らない人もいる。

窓際の席であくびをする人。

後ろの席で携帯をいじっている人。

隣の席の女の子と手紙交換をしている人。

1 番前の席なのに堂々と居眠りしている人。

いろんな人がいろんなところで息をしている。

私の隣の席に座る明日香は、少しだけ寝むそうな顔でホワイトボードに書かれる文字をノートに写していた。

私はそんな明日香の横で、教室をちらちらと見渡した。

「おわつたー！」

「お疲れ〜」

「早く学食行こー！混んじゃうしー！」

そそくさと明日香は準備をして教室を出た。

私はその後をちょこちょこ歩いてついていく。

廊下には何年生なのか、何学部なのか、全然わからない人たちが溢れている。

この人よく見るな〜とか、この人この間も見たとか、そんな人もたまににいるけど、だけど大半は知らない人ばかり。

少し周りを見渡しただけで、こんなにもいろんな人に出逢えるなんて、なんだか得した気分になった。

「あ！明日香！あの人お洒落〜」

「本当だ〜！狙えば？」

「もー！すぐそっちに持っていくんだからー！」

「だって、きららにも早く恋してほしいんだもーん」

私だってすきな人を作りたい。

明日香みたいにキラキラと輝いてみたい。

すきな人のアドレスを知ってドキドキしたい。

でも、すきってなだっけ？

すきってどんな感覚だったっけ？

「明日香はさあ、先輩をすきになる前はどんな人をすきだったの？」

「え〜何？急に〜」

「ん〜？なんとなく〜」

「あたしはねえ…先輩をすきになる前は彼氏のことですきだったよ
「彼氏いたんだあ」

「いたいた〜、1か月前くらいに別れちゃって、でもしばらくはず
つとすきなままだったなあ…」

「どんなふうですきだったの？」

「どんなふう？」

「うん」

「う〜ん…なんだろう。どうしても意識しちゃって言うか、どう
しても嫌いになれないし、どうしても許しちゃっし、どうしても良
いなって思っちゃっう感じかなあ？」

「ふうん」

「きららはそう思ったことないの？」

「あつたよーな、なかったよーな…」

「恋の感じ方なんて人それぞれだから、きららにとっての素敵な恋
ができるといいね」

「自分にとっての素敵な恋かあ……」

私にとっての素敵な恋ってどんな恋なんだろうか。

いつか明日香みたいに「どうしても何かしてあげたい」とか「どうしてもこうしてしまう」「っていうような感情が生まれてくるのかな。学食に着いて、私たちは空いている窓側の席に座った。

あまりおいしくないミートソーススパゲティを口に頬張りながら私は窓の外を見た。

「あっ」

空気が止まった。

というか、一瞬だけど、息をすることができなかった。

「どうしたの？」

明日香のなんでもないような心配した表情も言葉も耳に入らない。ただ、時間だけが、ゆっくりとスローモーションのように流れていた。

私の目にとまったのは一人の男の人だった。

短めの茶色い髪の毛にゆるくあてられたパーマと白と紺色のボーダーのTシャツの上に灰色のパーカーを羽織って、黒いスキニージーンズを履いた男の人。

「か、っこいー…」

「だれだれだれだれ！？どれどれの人！？」

興奮する明日香の横で、小さく彼を指差してみる。

彼は気づいていないみたいだけど、気づかれたらどうしようって少しだけドキドキした。

「あーゆう人がタイプなのねえ？」

明日香は少しニヤニヤしながら私を見てそう言った。そうです。私、彼みたいなタイプ、どんぴしゃです。

「もつすきでしょ」

「え？」

3 講目の最中で、隣に座る明日香が、私を覗き込んでそう言った。

「だれを？」

「さっきの彼を！」

「さっきの彼…」

急に思い出す。

あの時の感覚を。

息ができなかつたはずなのに、苦しくない、むしろ心地よい感覚を。

「もう、すぎでしょ？」

すぎ？…すぎ、かもしれないのかもしれけど、まだ、やっぱり、
わかんないや。

「わかんないや」

「でもきつと、これからもっとすぎになるよ」

「なんでわかんないのー」

「勘だよ勘、あたしの勘は当たるんだよ」

明日香の勘は当たるらしい。

明日香が変なことを言ったからなのか、明日香の勘が当たっている
だけなのか、3講目の間、私の頭の中はさっきの彼でいっぱいだった。

そして、勝手にどんな人間なのかを想像してみる。

素朴な顔をしていたから、きつと無口だと思う。

声は…低め？高くはない気がする。

服装はシンプルなものが好きで、こだわりもありそう。

彼女は…いそうなようでないそうで…。

勝手に想像した彼の性格に、また息が止まりそうになった。

「か、っこいー…」

息を吐きだすような声で、私はそう呟いてから机に突っ伏した。そんな私の様子を、ニヤニヤしながら横目で見ている明日香を心配で感じた。

「あたしもう今日の講義これで終わりー！」

「いーなー」

「きららはあと1講残ってるんだっけ？」

「そっだよー」

「まあ、がんばって！」

「えー！待っててよー」

「やだよーそんな時間長いのやだし」

「ちえー」

「がんばってねえ〜」

そう言っただけで明日香は小さく笑って手を振った。

明日香の後姿はとても魅力的で、真つ赤なりユックが似合っていた。帰ったらだいたい好きな先輩にメールをするのかな。うまくいくといいな。

私も、さっきの彼と、ちょっと仲良くなってみたいな。

一人で次の教室に向かっていている途中、私はなんだか緊張していた。

もしかしたら、彼に会えるかもしれない。

もしかしたら、彼とすれ違ってもいいかもしれない。

もしかしたら、彼も私を気にかけてくれるかもしれない。

たくさんの「もしかしたら」を抱えながら、私はたくさんの知らない人が溢れる大学内を一人で歩いていった。

「いないなあ…」

たくさんの「もしかしたら」の考えとは裏腹に、彼は一向に見当たらなくて、やっぱり人生ってそんなに簡単なもんじゃないなと改めて思った。

4 講目が終わって携帯を見ると、明日香からの着信があった。私は教室を出て、歩きながら明日香に電話をした。

「もしもし」

「もしもし？講義おわった？」

「終わったよー」

「おつかれー」

「なしたの〜電話してきて」

「いや〜なんとなくねえ、さっきの彼に会えたかなって思って」

「会えないよ全然！」

「本当に〜？」

「…あ」

さつき明日香に「会えないよ全然」って言ったばかりなのに、言っただけで…ばかりなのに…。

ふんわりと小さな風が私の髪を揺らす。彼が起こした小さな風だ。少しだけ笑ってすれ違う彼の余韻を、私は目の中で感じた。

「もしもーし？きらら〜？」

「…あ、会っちゃった…」

「えー！？まじでー！？」

ドキドキが止まらない。心臓が死んじやいそうなくらい。それくらい彼はかつこいい人間だった。

やばい、私、本気で彼に恋をしてしまつかもしれない…。

家に帰ってから、私は彼のことばかり考えていた。

彼はどんな人間なのか、好きな女の子のタイプはどんな子なのかとか、どんな音楽を聴いてどんな本を読んでどんな家に住んでいるんだらうなんて…。

そう言うことを考えているうちに、どんどんと私は彼を好きになっていった。名前も学部も年齢も知らない彼に…。

こうやって人は恋をするの？

それともこれが、私にとって素敵な恋の仕方なの？

なんだか違うような気もしたけど、私はこの感情を止めることはできなかった。

「きらら〜ごはんだよ〜…きららっ?」

毛布にくるまって彼のことを考えていた私は、まったくうらちゃんの声に気づくことができなかった。

「きららー!なに寝てんのー!」

「わー!寝てないよ寝てない!」

「じゃあなんでこんな毛布にくるまってんの」

「考え事ですー」

「あらそうですかーごはんだから下りてきなさいねー」

うらちゃんは可愛い。お花みたい。

私もお花みたいかな？

「今日は2人のだいすきなハンバーグよ」ってお母さんが言った声も「きらら、チャンネル取って」ってうらちゃんと言った声も、ぜんぶ曖昧に受け流して、私は彼のことだけを考えた。

一人暮らしなのかな。

ごはん食べてるのかな。

でも実家に住んでいる気がする。

そんなイメージがある。

あーかつこいいい。

かつこいいいー。

「…ら、きららー！」

「はいっ」

「何ぼーっとしてんの？具合悪いの？」

「うっん、悪くないよ。悪くないけど…」

「悪くないけど？」

「なんか、胸がいつぱいでお腹いつぱい…」

「なにそれー？」

大好きなハンバーグも喉を通らない。

苦しいわけじゃないし、吐きそうなわけでもない。

ただ、私の知らない感情が胸をいつぱいにして、なんだかお腹が満たされている気分になる。

「ごめん、もういいや」

「残すのー？」

「うん、明日食べる」

「ふうん…」
「ごちそうさま」

私はハンバーグにラップをかけて冷蔵庫に入れてから自分の部屋に戻った。

ベッドの上にあおむけに寝転がって、今日のあの一瞬を思い出す。

「かつこよかったなあ…」

「やっぱり恋ね？」

「わっ！なんで居るのうらちゃん！」

私のため息交じりの「かつこよかった」の言葉にニヤニヤしながらうらちゃんが部屋に入ってきた。

「なんかいつもと様子が違うから、ちょっと心配になっちゃって…。でもそっかー、恋かー」

「からかうなら帰ってよね」

「からかわないわよ」

「本当に？」

「うん、だって恋って素敵じゃない」

たった10分しか変わらないのに、どうしてうらちゃんはこんなにも大人なんだろう。

振る舞いとか、人生観とか、考え方とか、全部がなんだか大人っぽい。私とは、大違いだな…。

「どんな人なの？」

ベッドの横にうらちゃんが腰かけて私に聞く。
きれいで長い髪の毛がゆらりと揺れた。

「どんな人…まだわかんない」

「おなじ学部の人？」

「わかんない」

「え？もしかして一目惚れとか？」

「…うん」

一目惚れって、なんだか恥ずかしい。彼の外見しか見ていないような感じで、面食いつて思われちゃいそう。
だけでしょうがないよね。だって、だって、気になっちゃうんだもん。

「その人、かつこいいんだ？」

「そりゃあもう、うんとかつこいいよ」

「はははっ、きららのかつこいいは私にとってもかつこいいだから、
なんだか複雑な気分だなあ」

「なんで？」

「妹のすきな人がイケメンなんて、なんだか悔しいじゃん？」

いくら私のすきな人がイケメンだったとしても、4年も俊ちゃんと付き合っているうらちゃんの方が、私よりも何枚も上手だよ。

「盗っちゃうやだよ？」

「盗らないよ！俊ちゃんいるもん」

「だよー」

「だよー」

うらちゃんは可愛く笑ってベッドに寝転んだ。

それから少しだけ俊ちゃんの話をして、自分の好きな男の子のタイプを話合って、いっぱい共感してから眠った。

うらちゃんと私は一卵性の双子だから、きつと好みが似ているなんて誰も不思議に思わないけど、私には不思議で仕方がなかった。

いくら一卵性の双子で顔や体系が似ていたって、私たちは別の人間で、うらららときらら。

どうしてこども好みまで似てしまっているんだろう。

「きららー!!」

朝から元気な声を聞く。

明日香、いいことでもあったのかな。

「おはよう明日香」

「おっはよう!」

「何かいいことでもあったの?」

「それがさあ! 昨日先輩と電話しちゃったさ!」

「本当に!?!」

「なんか最初はメールしてたんだけど、メール打つの面倒だから電話にしようかってなって」

「いーな」

「でも、きららも昨日会ったんでしょ?」

「そう! 会っちゃったの!」

「あたしはさあ、先輩4年生だからあんまり学校来ないんだよね。だから会えるきららが羨ましいよ」

「そっかあ…。でも連絡取ってるなら、会おうと思えばいつでも会えない?」

「そうなんだけどさあ…」

「そこシャイになっちゃだめだよ」

「だよね」

私は例の彼に会うことができる。まあ、偶然でしか会うことはできないけど。

だけど明日香は先輩と電話ができる。メールだってできる。いくら

でも仲良くなれる。
そんな明日香が、私は羨ましい。

人それぞれに悩みがあつて、人それぞれの恋があつて、それには満たされている部分と満たされていない部分がある。
当たり前だけど、なんだか不思議で、それでいて切ない。

「すべてが満たされればいいのにね」
「満たされなくなつていいよ」

明日香の表情は切なくもなく、爽やかでもなく、なんでもない表情だった。

「満たされちゃつたら、そこで終わり。満足して、きつと無関心になる。もう何も求めるものがなくなつてしまつたら、もうそれはきつとさよならの合図なのかもね」

明日香はたまにすごく大人っぽいことを言う。
普段から大人な雰囲気は出ているけど、その雰囲気はふわふわした大人で、そんな明日香からこんな言葉が出てくるなんて想像できないくらいだ。

私の周りはみんな大人で焦る。私は一人で取り残されていないだろうか…。

「ちょっとトイレ行つてくる」

明日香は私が明日香のことを大人だなあなんて思っていることや、明日香に少しだけ憧れていることや、明日香を少しだけ羨ましく思っていることなんて知らないんだろうなあ。

そんなことを考えながら、女子トイレの前で私は明日香の帰りを待

っていた。

「リグレットの恋人ってさあ、直訳したら何？」

私は無意識に声のする方を見た。

リグレットの恋人は私の好きなバンドだった。

「直訳したらー…後悔の恋人？」

「なんか意味深だな」

「あいつらしいよ」

「だなー」

私の目の前を通り過ぎる男2人。1人は黒髪の短髪で、野球でもやっつてそうな体格。

もう1人は…例の彼。私の気になる、例の彼だった。

私は急にいま自分が立っている場所に恥ずかしさを感じた。

なんか彼がこつちを見ていたような気がするし、それに少しだけ笑いかけたような気もした…。

「なんかトイレって恥ずかしい!!!!!!」

心の中で叫びながら、私はその場から少しだけ遠くに離れた。

トイレから出てきた明日香がきよきよと私を探す。

「あ、ごめんごめん。ありがと待っていてくれて」

「う、うん…」

「なしたの？」

「また、会っちゃった…」

「うそー！やったじゃん！」

「私の好きなバンドの話してた…」
「いいじゃんそれ！趣味合っくんじゃん！」

彼と私はどうやらなんとなく趣味が合うらしい。まだ、はっきりとはしていないけど。

リグレットの恋人なんてマニアックなバンド、この大学で知ってる人がいたなんて信じられなかった。

しかもそれが、私の気になる彼だなんて、さらに信じられなかった。

リグレットの恋人は私の好きなバンド。どこが好きなの？って聞かれてもきつと説明できない。

なんでか彼らの作る音楽がすきで、なんでか彼らから目が離せなくて、なんでか彼らの音楽を聴いてしまう。

これって、なんだか恋に似ている気がする。以前、明日香が言っていた恋の感覚に…。

そんな私のだい好きなバンドを、私の気になる彼もすきで、そしてそんな気になる彼を、私は見つけた。

それはすごく偶然で、そしてそれはすごい巡り合わせで、なんだか今なら運命の出会いってやつも信じられそうな気がした。

「次会ったら話しかければ？そのバンド私もすきですって」

「無理だよいきなりそんなことー！」

「だよー私も無理だわ」

「でしょ？」

私はきつと、彼に話しかけることはできない。

だってとつても臆病で、とつても小心者だから。

「でも話してみたいでしょ？」

「そりゃあ話してみたいよ」

「だったらいつかは、話かけなきゃね」

「うーん…いつか…がんばってみるよ」

話かけれるのだろうか。無理な気がする。

でも話かけないと始まらない。だけどやっぱり、無理な気がする…。

「きららー!!」

「あ、うらちゃん」

「携帯なんども鳴らしたのにつながらないんだからあ」

「えーうつそ、ごめんねえ」

「いいけどさー見つかつたし」

「どうしたの?急用?」

「今日、バイト入ってるんだけど、4講目が長引くらしくて行けないから、代わりに行ってくれる?」

「休めばいいじゃん」

「それが休めないのー」

「えー…しょうがないなあ」

「ありがとーきららー!!」

私はたまにうらちゃんのバイト先にバイトをしに行く。一卵性の双子だから、店長にバレたりはしない。

だけどバイト先のうらちゃんの先輩や友達や後輩にはなぜかバレてしまう。

やっぱり、私たちは似ていないのかもしれない。

「バイト行くの?」

「うん、そうなったみたい」

「双子ってなんだかラッキーだね」

「そうかなあ」

「こつゆつとき、お互いを頼れるっていいなあって思うよ」

「でも明日香にもお兄ちゃんがいるでしょ？私はお兄ちゃんが居る
ほうが羨ましいよ」

「あたしの兄ちゃんはダメだよ。全然しつかりしてないもん」

「ただど明日香のお兄ちゃんはものすごくかっこよくてお洒落だ。
のんびりした雰囲気は私はずきだった。」

「恋とかじゃなくて、お兄ちゃんとしての憧れみたいな、ね。」

朝、トイレの前で会った以来、気になる彼には会わずに放課後になった。

どうしてるんだろう。

私のこと、気づいたりしてるのかな？

でもなんとなく見られてる気がするし、なんとなく笑いかけてくれているような気もする。

これが噂の自意識過剰ってやつなのかな。

どうしてこんなにも会いたくなって、どうしてこんなにも胸がもどかしくなるんだろう。

これが私の恋の感覚なのかな。これが私にとっての素敵な恋なのかな。

「また明日ね」

「またね、バイトがんばって」

「ありがとう」

明日香と別れてから、わたしはバイトへと向かう。

うらちゃんのバイト先は大学から歩いてすぐの駅から電車に乗って5分くらいのところにあるファミレス。

ここの制服は可愛いから結構好きだったりする。

「おはようございます」

「おはよー」

「一つ年上の先輩の佳苗さん。金髪のギャルお姉さん。」

「ねえねえ、この間新しく入った波多野くんってなんだか可愛いよねえ。」

「波多野くん?」

「ほらーうらちゃんと同じ大学のー」

「…?」

「あ、今日うらちゃんじゃなくてきららちゃんの方でしょー!」

「よくわかりましたね!」

「そりゃあわかるよー会話についてこれてない感じとか!」

「私とうらちゃんってやっぱり似てないですよね?」

「いやいや全然似てるから!似すぎててわかんないくらい!」

やっぱり、私とうらちゃんは似ているらしい。

私とうらちゃんじゃないとバレルのは、私とうらちゃんが似ていないからじゃなくて、私がただ、この場所に慣れていないからみたいだ。

「でも、うらちゃんと同じ大学なら、きららちゃんとも同じ大学になるのか」

「誰がですか?」

「さっき言った波多野くんって人!」

「波多野くんですか…?」

「うらちゃん、結構かっこいいって言ってたから、きららちゃんも好きなタイプなんじゃない?」

「絶対好きなタイプだと思います」

「あははっ、でしょー!」

波多野くん…どんな人なんだろうか。うらちゃんのかっこいいは信

用できるから恐ろしい。
もし気になる彼よりもかっこよかったらどうしよう。しかもこの
ファミレスの男子の制服もかっこいいから、さらにかっこよく見え
ちゃったらどうしよう。

「佳苗さん、いま休憩中ですか？」

「そうだよー」

「じゃあ私急いでホール行ってきますね」

「お願いします！」

波多野くんがどんな人だかは知らないけど、かっこいいなら見てみ
たい。

だけど私の中をいっぱいにしているのは波多野くんじゃない。

名前も学部も年齢も趣味も住所も誕生日も何も知らない彼を、私は
こんなにも好きになってしまった。

勝手な想像で彼の性格を作り上げて、私は彼に恋をしている。

もしかしたら想像とは正反対の人かもしれないし、もしかしたら最
低な奴かもしれない。

だけど、それでも許せちゃいそうな気がする。

「どうしても意識しちゃうって言うか、どうしても嫌いになれない
し、どうしても許しちゃうし、どうしても良いなって思っちゃう感
じかなあ？」

不意に明日香の言葉を思い出す。私も、こんな気持ちを味わうこと
ができたよ。これが恋なんだって思えるようになったよ。

明日香の勘は大当たりです。明日なにかおごってあげようかな…。

「おはようございます」

キッチンの人とホールの人にあいさつをする。久しぶりに会う人たち。

知り合い以上友達未満のそんな関係の人たち。

「おはよう」

「おはようございま…」

知り合い以上でもない人が私の目の前にいる。

「波多野…くん？」

「そっだよ？もう名前忘れたの？波多野慶介だよ」

「波多野…慶介」

ドキドキが止まらなかった。かっこよかった。

うらちゃんのこととは本当だった。彼はとっってもかっこいい。

本当にとってもかっこいい。

私は2回目の恋をした。

6

「明日香ー！！！！」

「なしたのー？バイト終わったのー？」

「終わった終わった！終わったよー！」

「やけに機嫌いいねえ、どうしたの」

「例の気になる彼の名前わかったよー！」

「うっそ、なんて言うの！？」

「波多野慶介！」

私は彼に2回も恋をした。

最初は私が勝手に作り上げた想像の中の彼。
2回目は、実際に会って話をした現実の彼。

「この間、見ました。リグレットの恋人の話をしてた…」

「あ、あれやつぱりうらちゃんだったの？」

「うらちゃんじゃないですー！」

「え？」

「あれは妹のきららです」

「妹？え？妹？」

「妹……」

「え、もしかしてうらちゃんって双子なの？」

「双子だし、私はうらちゃんじゃないです。うらちゃんの代わりに来た、妹のきららです」

「……ごめん、頭の中整理してた……うつそー！すっげー！すごい似てるんだね」

「似てないですよー！うらちゃんはリグレットの恋人なんか聴かないし……」

「そうなの？リグレットの恋人めっちゃ良いのにね」

「ですよー！私バンドの中で彼らが1番好きです」

「俺も俺も！まさかこんな近くに分かりあえる人がいたとは……！」

「びっくりですよーね」

「本当にびっくりだよーね！きららちゃんかー、よろしくね」

波多野くんの笑顔は私の想像していた通りの笑顔で、波多野くんの声は私の想像とは少し違って、波多野くんのしゃべり方は私の想像とは大分違って、だけどそんなことも許せちゃう気がした。

だって、私は彼が好きだから。

名前も知らなかった彼。

だけでもう知らない彼じゃない。

波多野慶介

私と同じ大学の3年生

学部は経済学部

意外とおしゃべりで声も少し高め

シンプルな服装がすきなお洒落さん

そして

彼は私の、すきな人。

格付け彼女(前書き)

わたしは26位の女

格付け彼女

恋愛なんてただの暇つぶしだと思ってた。

付き合ってきた男は、みんな私との恋愛を暇つぶしに使っていたし、私も彼らとの恋愛を暇つぶしに使ってきた。

結婚もその暇つぶしの延長戦で、飽きない暇つぶし相手を自分のものにするだけの契約に過ぎないと私は思っていた。

そしてそれが世界の当たり前だと思っていた。

思っていたはずだったのに、暇つぶしじゃ物足りない恋愛を私は見つけてしまったみたいだ。

冬になった。

人肌が恋しくなる季節、親友の奏恵は彼氏が欲しいと嘆いていた。

「彼氏欲しくくつつきた〜い寂しすぎる〜死にたい〜合コン行きたい〜合コン!!! そうだ!!!合コンしよう合コン!!!」

奏恵は思い立ったら即行動タイプの性格で、私はそんな奏恵に振り回されてばかりだった。

「合コン 合コン 美佳も来るよね?」

「あゝあたしはいいやっ」

「え〜なんでえ〜」

「一応:彼氏いるし」

奏恵には彼氏の話はしたことが無かった。

私に彼氏がいることも、その彼氏が奏恵の知っている人だってこと

も。

「なにそれえ！！きーてないー！！」

奏恵はぷつくりと頬を膨らませて私を睨んだ。

「ほらっチャイム鳴ったよ、席戻んな」

幸い、チャイムが鳴ったので、私は奏恵を自分の席へと追いつ返すことができた。

次の授業は日本史だった。

チャイムが鳴って少ししてから、教室のドアがガラツと開いた。

ストライプのワイシャツに紺色のネクタイを締め、細身の黒いパンツを履いた若い男が教室に入ってきた。

「しよーちゃんおはよー！」

しよーちゃんと呼ばれる彼は生徒に人気がある。イケメンだから特に女子生徒に人気だ。

私はそんな彼の授業がなんとなく嫌いだった。

小林将平

25歳

男

日本史教師

そして

私の彼氏。

出逢いは簡単だった。マンガやドラマや小説によくあるパターンでもちよつと違うのが、私は彼が大嫌いだったってこと。

ただどいつの間にか好きになって、いつの間にか夢中になっていた。

悔しいけど、私は彼がいないと嫌だと思う。暇つぶし以上の気持ち私を私に抱いている。

彼は人気だし、不安になることはいつまでも絶えないけど、それでもなんとか大丈夫だった。

なんとか、大丈夫だった。

授業中、彼の細長くて骨張った綺麗な指に持たれたチョコレートには似合わない可愛らしく綺麗な文字を生む。

私はその瞬間をただずっと見つめていた。

目が合うと恥ずかしくなるから、彼がこちらを振り向くと同時に私は教科書を見る。

こんなにドキドキとワクワクが混ざった恋愛は初めてで、私はこの感情に溺れそうになる。

溺れそうになる。

授業が終わると、すぐに奏恵がこっちへ向かってきた。

「ね〜！さっきの続き！彼氏って誰よ〜！」

「奏恵の知らない人だよ」

「そうなの〜？」

「うん、年上だし」

「まじ？美佳大人」

「ははっ、大人じゃないよ」

私は大人なんかじゃない。きっと子供でもない、ただの17歳でしかないんだ。

制服のポケットからバイブの振動とともに携帯の着信が私を呼んだ。送信者は小林将平。

「今日会える？」

シンプルなその文章に私は何度も恋をした。必要とされている気がした。愛されている気がした。

「いいよ」

そんな彼のシンプルな文章に私もシンプルな文章で返事をする。こんなシンプルな関係がとても心地良かった。

「メール、彼氏？」

「うん」

「いいーいいーいいー！あたしも彼氏欲しいー！」

「麻衣子でも誘って合コンすればいいじゃん？」

「だって麻衣子合コンだと超キヤラ変わって男みーんな盗られちゃうもん！」

「ははっ、麻衣子は魔女だもんね」

「そー！本当に魔女！」

麻衣子は魔女だ。

落とせない男はいないくらい、麻衣子は魅力に溢れている。

放課後、奏恵は魔女を合コンに誘うって張り切って教室を出ていった。

私はそんな奏恵を見送ってからいつもの場所へ向かう。

学校からちよつと行ったところに、学校の人間はあまり通らない小さな道がある。

そこで私はいつも彼と待ち合わせをしていた。

空には明るい水色が広がっていて、薄い白い雲が煙のように泳いでいた。

私の口から吐き出されてゆく薄い白い息も雲の一部みたいに感じた。

「お待たせ」

小さな道の入り口に黒い車が停車した。小林将平だ。

「おはよ」

「おはよ」

適当に挨拶を交わして、私はその黒い車の助手席に座った。彼の匂いをふわつと感じてまた胸がキュンとした。

「何処行く？いつものところでいい？」

「どこでもいいよ」

いつものところとはラブホテルのことだ。彼はラブホテルが好きだった。

別に何をするわけでもなく、目的もなくそこへ行く。

しゃべったり、わらったり、私はそれが幸せだと思っていた。

「今日さ、奏恵が彼氏欲しいってうるさかったよ」

「まじ？坂野かわいいからすぐできんじゃん？」

「ははっ、でも奏恵は良い娘だから良い人に出会ってほしいよ」

「美佳は友達思いだなあ」

小林将平は運転をしながら左手で私の頭を優しく撫でる。
それにまたキヨンとする。

「普通だよ」

「普通って難しいじゃん？美佳はすげーよ」

照れた顔は恥ずかしいから見せない。

私は窓の外を見つめながら小さく頬を赤らめた。

「奏恵きょう合コン行くんだって」

「美佳も行くの？」

「誘われたけど断った！魔女と行くらしいよ」

「魔女？」

「宮本麻衣子」

「…宮本が魔女？」

小林将平は疑った顔で私に聞いた。

宮本麻衣子が魔女なことは彼にとってとても理解できないことだったんだと思うし、他に理由があることも私はもう知っていた。ただどためらうこともなく、私は宮本麻衣子について話をした。

「魔女みたいなもの、麻衣子は。男の子の前ですごいの、キャラが変わったり、声が変わったり、目が変わったり、しぐさが変わったり。麻衣子に落とせない男はいないよきつと」

「ははは、女なんてみんな魔女じゃないかあ！男の前で変わらない女の方がレアな気がするよ」

「……私も魔女？」

「うーん…美佳は見習い魔女かな！下手だもんなあ男に対するしぐさとか全部。まあ、俺はそんな見習い魔女ちゃんが好きだけどな」

そう言つてニカツと笑う小林将平を独り占めしたかった。誰にもわたくしはたくなかつたし、誰にも見られなくなかつた。

同じクラスあの娘にも、違うクラスあの娘にも、学年の違うあの娘にも、私のよく知るあの娘にも、もちろん魔女にも。

ラブホテルに着くとすぐに私はテレビの電源を付ける。普通のテレビ番組を見る。

いつもなら小林将平も隣に座つてそのテレビを見ながら笑つたりしていたのに、今日は少し違つた。

「今日はテレビ禁止」

小林将平はベッドに座る私を見下ろしながらテレビの電源をリモコンで消した。

「どうして？」

「美佳を愛したいから」

「…………愛？」

彼の言う愛はいつものシンプルなメールではないのか？やさしく撫でる左手ではないのか？

彼は私を愛したことはなかったのか…？

そんな私の困惑した感情にもお構いなしに、彼は私に覆いかぶさる。あたたかい何かを私に与える。

初めてではないこの経験が、初めてのように感じた。

今までなんとも思わなかったこの行為を、初めて切ないと感じた。相手が彼だったからなのか、それとも…。

「ごめん、いやだった？」

「…………べつに」

私はかすれた声で言った。汗が冷えて寒かったからか、小さく泣いた後だったからか、あんまりわからなかった。

「美佳、愛してるよ」

「うん…………」

いつもの言葉も、今日は切なくて聞きたくなかった。

愛してるなんて、嘘つき。

テーブルの上で携帯が鳴った。
奏恵からのメールだった。

「魔女つかまらなくて合コン中止（T―T）魔女、彼氏いるらしい」
私が開くその携帯の画面を隣で小林将平がのぞき込む。

「坂野からか？」

「魔女に彼氏いるからってつられたらしいよ」

「ははっ宮本やるじゃん！」

煙草に火を付けながら小林将平は笑った。それがまたちょっと切な
かった。

そろそろ帰るか、と短くなった煙草を灰皿に押しつけて小林将平が
言う。

私は小さくうなづいて、ベッドからおりて服を着た。

帰りの車の中で何を話したのか、あまり覚えていない。

ただ私は不意に、小林将平と初めて出会ったときのことを思い出し
ていた。

こいつ嫌いだ、と思った、忘れかけていたあの日のことを。

あの日は肌寒い日だった。

ボブヘアの奏恵がまだロングヘアだった頃のことだ。

「美佳ー！今日あたらしい教師くるらしいよー！」

「こんな中途半端な時期に？」

「なんか、日本史の河島先生が病気で入院したらしくて、その代わりなんだって！」

「ふう〜ん」

教師に興味は無かった。べつに好きな教師もないし、教師なんてむしろ嫌いな方だった。

これから来る教師もどうせその辺の教師と一緒にだろうと思っていたし、奏恵みたいにワクワクしながら彼が紹介されるのを待つわけでもなかった。

体育館に向かう途中、知らない男を見た。

目が合つて、彼は笑って私に手を振った。私は彼に向かって軽く会釈をした。

体育館に響く校長の音が、知らない男の名前を呼ぶ。

男は校長に軽く会釈をしてマイクに向かった。

「小林将平です」

低くて綺麗な声が体育館に響く。女子生徒が少しざわめく。

だけど私は微動だにしなかった。

私はその辺の女子生徒みたいに若い教師にキヤーキヤー騒ぐほどバカじゃない。

私は、バカじゃない。

そう思っていたのに、しょせん私はその辺の女子生徒と同じだった。

「松嶋さん」それが彼からの初めての言葉だった。

「松嶋さん」

「…はい？」

「資料室はどこかな？」

「……………あっち」

「あっち…って、あっち？」

「うん、あっち」

「あっちね、ありがとう」

私は彼が嫌いだった。教師はみんな嫌いだったし。

だけどこのとき、私は不覚にもドキドキした。心臓が高鳴った。

きっと私は小林将平が嫌いだったんじゃないかと、こんな風に感情に振り回された自分が嫌いだったんだ。

「美佳？聞いてる？」

「…え、あ、ごめんっ」

小林将平の声で私はハッと我に返った。

「なんだよ、ボーツとして」

「ごめん、ちよっと考え事」

「何について？」

「うん、いろいろ」

「なんだそれ」
「ははは」

彼が初めて私に言った松嶋さんが、いつの日か松嶋になって、いつの日か美佳になった。
私は彼に名前を呼ばれることが好きだった。

「じゃあ、また学校で」
「うん、また学校で…」

家族にバレないように、私の家から少し離れた場所で私は彼と別れた。
たぶん彼とはあと1ヶ月は遊べないと思う。今日も1ヶ月ぶりくらいに遊んだんだから。
何故かは、なんとなくわかる。なんとなくわかるから、私はとても切ない。

私は知ってる。私は小林将平の1番じゃない。
確か、26番目。

私は26位の女。

それを知ったのは、けっこう前のことだ。それはまだ冬になる前で、まだ暖かい秋だった。

その日、いつもみたいな車でラブホテルに向かう途中、彼はコンビニに寄ろうと言った。

なんとなくめんどくさかったから、私は車をおりずに中で待っていた。

彼の車の中を、そのとき初めてまじめに見わたした。

彼の車の座席のポケットには、生徒名簿が入っていた。

その名簿に載っているのは全て女の名前。

さらにそれは出席番号順ではなく、彼のお気に入り順で並んでいた。上から自分の名前を確認する。

私の名前は26番目に記入されていた。

しかもその名簿には順位と名前の他に評価も書いてあって、私の評価は10点満点中の7点だった。

ちなみに1位は宮本麻衣子。評価は10点満点中の10点。

小林将平にとって魔女は最高の魔女なのである。

宮本麻衣子はすごく良い女だ。それはもうものすごく。魅力と書いてミヤモトマイコと読んでも良いくらいの魅力を彼女は持っている。

小林将平の1番は私じゃなくて宮本麻衣子だ。

私じゃなくて。
私じゃなくて。
私じゃない。

「美佳」

「何？きのう魔女にふられたのまだ悲しんでんの？」

「違う」

「じゃあどうしたのさ、もじもじして」

「……………好きな人ができた」

奏恵は小さい声でそう言った。

好きな人ができた、と。

「ええ！誰！？」

「年上なんだけどね……………」

奏恵は昨日、魔女にふられてもめげずに、違う学校の友達を誘って合コンに行ったらしい。

そこで出会ったのが大学生である小金井颯太だったらしい。

「そうちゃんって言うの！」

奏恵はキラキラしていた。可愛かった。そして安心した。

奏恵はあの男に、小林将平に興味がないということに。

「あつ、予鈴…席戻るね！」

「うん」

奏恵はキラキラした表情で席へ戻っていった。次は英語の授業だ。英語の授業中に、私のポケットの中を携帯が揺らす。小林将平から

だった。

「今日も会える？」

予想外だった。2日続けて会うことは今まで1度もなかったから。私は急いで返事をした。

「いいよ」

シンプルなメールにシンプルな返事。

だけど私の心は、ドキドキとワクワクが混ざっていてシンプルではなかった。

放課後が待ち遠しくて、私は授業をまじめに聞くことができなかつた。

「美佳！でね！さっきの続きでね…」

奏恵が嬉しそうに好きな人の話をする。

奏恵のこと、私はだいすきだから、奏恵に好きな人ができてすごく嬉しい。

だけどこめんね。

今はそれも耳に入らない。

私は放課後を待ちに待った。

「美佳くかーえろっ」

いつものように奏恵が言う。放課後は毎日のように私は奏恵と帰っていた。

「ごめん、今日ちょっと用事があったて…」

「そうなの？じゃあそうちゃんに電話してみよっかな〜！」

「そうちゃんってさっき言ってた人？仲良しなんだ？」

「さっきも話したじゃ〜ん！ちよう仲良しだよ！」

「そっか、良かった」

「なにが良かったの？」

「奏恵に好きな人ができて、嬉しいの」

「美佳あ〜ありがとお」

奏恵はキラキラしていた。

うらやましいくらいに、キラキラしていた。

いつもの場所に行く。昨日と同じ場所に。

「お待たせ」

小林将平が昨日と同じように黒い車の窓を開けて言う。

「おはよ」

「おはよ」

昨日と同じように適当に挨拶を交わして私は車の助手席に座った。昨日と同じように。だけど、どこか少し違った。

私と小林将平を乗せた黒い車は、いつものラブホテルの道を進まず、違う場所へ向かっていた。

「どこ行くの？」

「窓の外、見てごらん」

冬は日が落ちるのが早い。もう空は闇に包まれていて、窓の外を見てもよくわからなかった。聞こえたのは、波みたいな音。

「……海？」

「正解！」

暗闇に包まれた海は少しだけ紫色に見えた。波の音が暗闇から押し寄せてきて、本当は少し怖かったけど、私は素敵ねと言った。

「美佳……」

車の中で、小林将平の唇が私の唇に触れる。小林将平の息遣いが徐々に荒くなる。

「ん……っ」

「美佳……愛してるよ」

小林将平が26位の私を愛す。

今日は車の中で。

「…待つて！」

「美佳？」

「私いやだ」

「なにが？」

「26位の女なんて」

小林将平は黙っていた。

バレたとかヤバイとかマズイとか、そんなことをとっさに感じた表情すらしていなかった。

「26位だから何？」

「……え？」

「お前、うちの学校に女子生徒なんにん居ると思ってるの？そんなの26位なんてめっちゃ良い方だろ？しかも、今日なんでお前のと誘ったかわかるか？」

「……どうして……？」

「順位が上がったんだよ、お前の順位が」

私はすぐさま座席のポケットに入っている名簿を開いた。

「13位……？」

「そう、13位」

「……なんで？」

「最高だったから、お前の体」

小林将平は最低な男だった。

「昨日お前と初めてしたけどさあ、お前の体最高だったわ」

小林将平は私に覆いかぶさったまま話をすすめた。

「何がいつて、喘ぎ声だよ。お前の喘ぎ声で何度でもイけるわ」

小林将平の目はギラギラしていた。怖かった。私の知らない彼だった。

「13位だよ13位！26位でもすごいのに、さらに13位だぜ？すごいことだろ？」

確かに、とは思わなかった。嬉しくもなかった。誇りに思おうとも思わなかった。

私は小林将平の1番になりたかったただだったのに。

「また今日も良い声で鳴けよ」

私は黒い車の中で小林将平に抱かれた。これはきつと愛ではない。ただの暇つぶしに過ぎない。

私は彼の、小林将平の13番目の暇つぶし人形。

ただ、それだけの存在だった。

「美佳…もつと声聞かせて」

出したくない声が出る。

食い縛った唇から抜け出ていく声を殺してやりたかった。

「美佳…美佳あ…」

小林将平の荒い吐息がわたしの耳にかかる。

わたしは顔をしかめながら、声を殺しながら彼に抱かれる。聞かせたくも、聞きたくもない自分の声に、小林将平は興奮する。

「美佳…、これからも俺の女でいろな？」

わたしは頷きもせず、ただ茫然と時間が過ぎるのを待った。

恋愛なんてただの暇つぶしだ。

付き合ってきた男は、みんな私との恋愛を暇つぶしに使っていたし、私も彼らとの恋愛を暇つぶしに使ってきた。

結婚もその暇つぶしの延長戦で、飽きない暇つぶし相手を自分のものにするだけの契約に過ぎない。

そしてそれが世界の当たり前なんだ。

そう確信した夜だった。

私は13位の女。

小林将平を満足させるための暇つぶしでしかない。

私は13位の女。
今度は私が魔女になる。

愛してると呼んで（前書き）

ねえ、お願い

愛してると呼んで？

愛してると呼んで

夏は嫌いだった。

暑くてイライラする。

「うらちゃん、海、行きたいねえ」

「連れてってくれるの？」

「ん？免許取るまで待っていてくれたら連れてってあげるよ？」

「うん…じゃあ待ってる」

宇宙についてを熱く力説する教授の話はあまり聞こえてこない。

暑いと、なんだか頭がぼんやりとして力が出ない。

隣に座る俊ちゃんも私と同じで夏が苦手。暑い日の彼は異常に女々しくなる。

窓側の席に座る私たちは、窓を全開に開いて講義を受ける。

だけど今日は無風と言ってもいいくらいに風のない良い天気だった。

「俊ちゃん、宇宙連れてって？」

俊ちゃんとの会話が途切れないように、私はとっさに話題をふる。

本当はそんなに宇宙に興味はなかったけど、なんとなくとっさに出てきた単語が宇宙だったのだ。

「宇宙？うらちゃん宇宙行きたいの？」

「行きたい行きたい！」

「じゃあ宇宙飛行士目指そうか」

「それは無理でしょ」

「無理かあ、だよな」

俊ちゃんは頬杖しながらとろけそうな顔をしている。

私はそんな俊ちゃんのがたいすきだった。

宇宙について熱く力説する教授の話は耳に入ってこなかった。

ただこの蒸し暑い空間にぽつりぽつりと集まった学生たちの中に埋もれて俊ちゃんと隣同士に座っている今がなんとなく幸せに感じた。

「つらちゃん帰ろっかー」

講義が終わると、俊ちゃんは腕をうんと伸ばしてあくびをした。

「え、まだ今日の講義残ってるじゃん」

「さぼりだよさーぼーり」

俊ちゃんのごう言うところはあんまりすきじゃなかった。

少しだけ適当なところ。私はやることはちゃんとやりたい人だから、俊ちゃんみたいに適当にはやりたくなかった。

「だめだよーちゃんと出ないと」

「いーじゃんいーじゃん」

「だーめー」

「ちえ〜」

俊ちゃんはブスツとした顔で机に突っ伏した。

「俊ちゃん、怒った…?」

「ん〜?怒ってないよ」

「本当に?」

「本当に」

俊ちゃんは突つ伏していた顔をこちらに向けてにこりと笑った。
俊ちゃんの横にある窓に目をやるとそこからは青空が広がっている
のが見えて気持ち良かった。

暑いのは大きらいけど、夏の風景はなんとなくすきだった。

「うらちゃん、移動しよっか」

「うん」

2階の講義室から4階の講義室へと移動する。
蒸し暑い廊下の階段を汗をかきながら上る。

「今日も暑いね」

「本当だね」

そう言いながら、俊ちゃんは背負っていたリュックの中から去年の
大学祭のうちわを出して私の顔をあおぎ始めた。

「やく！前髪オールバック〜！」

「わはははは！うらちゃんだせ〜！」

「私もあおいだけるー」

お互い交代であおぎながら4階にたどり着く。

講義室では、また隣同士に座る。窓側は空いてなかったから、廊下
側に座った。

今度はさつきと違う教授が芸術について熱く力説をする。それもあ
んまり耳に入ってこなかった。

私は頬杖をつく俊ちゃんに夢中だった。

芸術について熱く力説する教授の声をBGMに、私は俊ちゃんのう
とうとした表情を見ながら一緒にうとうとした。

うとうとしながら、私は夢の世界へと向かっていた。

「ううらちゃん」

俊ちゃんの声が聞こえる。

私の名前はうらら。女の子。俊ちゃんはそんな私をうらちゃんと呼ぶ。

「うらちゃん、今日家くる？」

私はよく俊ちゃんの家に行く。

ご飯を作るのは私。俊ちゃんの好きな料理はハヤシライス。簡単だから、すぐに作ってあげられる。

私は俊ちゃんがだいすき。

俊ちゃんは私のことだいすきなのかな？

私は不安だった。

俊ちゃんは私に一度だって「すき」と言ったことがない。

告白したのも私から。

「ずっとすきだったんだ、今もずっと」に対しての返事は「ありがとう、僕もそう思ってたよ」。

あっけらかんだった。「僕もすきだよ」とか本当は言っただけだったのに。

俊ちゃんはいったって「うらちゃん」しか言わないし、私が「すきだよ」って言っても「うん、僕も」しか言ってくれない。

私は俊ちゃんのお愛がほしい。

俊ちゃんからの「愛してる」の言葉がほしい。

「うらちゃん、うらちゃん！」

私は目をゆっくりと開ける。
開いた目の前には俊ちゃん顔があった。

「おはよ、講義もう終わったよ?」
「うそお!」

にっこりと、くすくすと笑う俊ちゃん表情に、私は思わず顔がゆるむ。

俊ちゃんのこと、愛してるって思える。
私のことをもっと愛してほしいと思う。

「俊ちゃん」

「なに?」

「…なんでもないや〜」

「なんだそれ〜!」

俊ちゃんは持っていた去年の大学祭のうちわで私の顔を思い切りあおいだ。

大きな風が吹いてきて、私の長い髪の毛がなびいた。

俊ちゃんは大きな口を開けて笑っていた。

私も、一緒になって笑った。

今日の講義はこれで最後で、私たちはいつものように手をつながないで歩いた。

私の隣には俊ちゃん。

俊ちゃんの隣には私。

手なんかつながなくたって、隣に好きな人がいる。

ただそれだけで十分なくらい、私たちの付き合いは落ち着いていた。きつと年を重ねるたびに恋人たちは皆そうなっていくんだと思う。なんてったって、私たちはもう付き合って4年も経つんだ。誰もが通る、付き合いたてのカップルみたいに、自分たちの幸せを他の人に分けてあげたい！なんて思ってしまうほどの初々しい道を私たちはもう、とうの昔に歩き終えてしまった。

「タケル〜待ってってばあ！」

「お前歩くの遅すぎだから〜」

「うるさいなあもっつ！」

私たちの前をベタバタくっつきながら歩く高校生のカップルを見ても、私たちは「若いね〜」なんて言っただけ。彼らに対抗して手をつなごうか、とか、ちゅーしようか、なんてことは言わない。

落ち着いた私たちの付き合い。

落ち着いてしまった私たちの気持ち。

「俊ちゃん」

「なに？」

「手、つなごう？」

「え〜なにになにどしたの〜？」

「なんとなく〜たまにはいいかかって思ってた！」

照れた顔を見られたくないから、私はそっぽを向きながら歩いた。俊ちゃんはくすくす笑いながら、私の手を握ってくれた。

「たまにはいいね、こういうの」

俊ちゃんはいつもとちょっと違う、照れた感じの笑顔でそう言った。私はそんな俊ちゃん表情になんだか嬉しくなった。

二人で手をブラブラと振りながら夕焼けの空の下を歩いて家へ向かった。

私たちの前をベタベタとくっつきながら歩く高校生のカップルは、いつの間にかいなくなっていた。

「俊ちゃん」

「なに？」

「愛してるって呼んで？」

「呼ぶの？」

「うん。私の名前は今日から愛してる！」

「なんだそれ〜」

「ねえ、お願い。愛してるって呼んで？」

「… 變じりぬ。」

すきって気持ちと言わないと伝わらないとか言うけど、言わなくたって伝わる気持ちだってある。

だけどそれじゃ物足りなくて、不安で、心配で、愛されている証拠や言葉が欲しくなって、恋人にこんなお願いをする。

それが負担になったり、切なさになったり、孤独になったり…そんな風に人間は、愛と一緒に孤独を抱えて生きている。

私は俊ちゃんがすき。

俊ちゃんもきつと私をすき。

だから、きつと、大丈夫。

私の心の中には、大きな愛とちよっどいい孤独が住んでいる。

ちよっどいいバランスで、ちよっどいい愛情で、すきな人のことを愛せている気がする。

夕焼けに光る俊ちゃんは照れながら笑っていて、それは私の見たことのない俊ちゃん、私はもっと俊ちゃんのことを知りたくなった。そうやって落ち着いた私たちの落ち着いた気持ちに夕焼けみたいな火がまたついて、いつまでもずっと一緒に居たいって思えるのかもしれない。

そんな風に思った。

「俊ちゃん、愛してるよ」

「僕も愛してるのよと愛してるよー」

「あははっ、なんか変なの〜」

「変だろ？変なんだよ〜うらちゃん」

「うん、私やっぱりうらちゃんがいいや」

「うん、僕もうらちゃんの方がいいや」

「俊ちゃん」

「うらちゃん」

「おつおつ」

後悔の恋人（前書き）

私と付き合ったこと
後悔してますか？

後悔の恋人

君が裸足で駆けてゆくのを遠くで見守りながら
君が花畑に見えなくなるところを
僕は死にゆく人を見るように見つめるんだ

君が裸足で駆けてゆくその先に
僕の未来はあるのかい？

君が裸足で駆けてゆくその先に
君の未来はあるのかい？

春にこの曲は聴きたくなかった。
せつかくのぼかぼか陽気に、心がじとつとなる。

春にこの曲の歌詞は向いていない。
そのことには彼らも気づいていたけれど、事務所の関係でリリース
が4月になったのだ。

「春なのになー…雨っばい。梅雨っばい。湿っばい…でも、良い曲
…」

「ただいまー」

春だから、春っぽいワンピースを着て、近くのスーパーまで歩いて
買い物に行ってきた。

買ったものは白菜と牛乳と鶏肉とにんじんとじゃがいもと玉ねぎ。
今日の夜ごはんはシチューにしようと思う。

「はかどってる？」

「んゝまあまあかな」

「今日はシチューだよ」

「まじで？やったー」

私の彼氏の恭介はシチューが好物。

煮詰まって機嫌があまり良くないときは、子どもをあやすように好
物を作っであげる。

そしたら恭介も子どもみたいに、ころつと機嫌を直してニコニコし
てくれる。

恭介はバンドを組んでいる。

バンドと言っても、パンクでもメロコアでもなくて、ロックと言え
ばロックのような気もするけど、ただ曲調はすごくポップで可愛
らしくて、歌声だってやわらかい。

だからなのか、女の子のファンが多い。
ちよつと妬げちゃう。

「きょーすけー」ってみんなが呼ぶと、恭介よりも私の方が先に反
応してしまう。

もう条件反射みたいに。パブロフの犬みたいに。

「できたー！」

「できたの？」

「できたできた！超良い歌詞ができた！」

「うたってみてー」

「まだ曲付けてないからダメ〜」

「えー、いじわる」

「曲付けたら聴かせてあげる」

恭介は作詞作曲を手掛けている。恭介は天才だと思う。
だってこんなに良い曲を作れるのだから。

「今回の曲でね、女性コーラス入れたい部分があるんだ。そこ、あ
きほがうたってくれる？」

「え？私が？」

「そう、あきほが」

「プロじゃなくていいの？」

「だって俺たちもプロじゃないもん」

「プロだよ！きょーすけたちは十分プロだよ！」

「気分はまだまだアマチュアだよ」

恭介たちのバンドはなかなかの人気がある。

マニアックだつてよく言われているけど、そのわりにファンは多い方だと思う。

「お願い！あきほにやって欲しいんだ！」

「うゝ…わかった、がんばってみるね」

「まじで？ありがとう！」

恭介の笑顔には勝てない。

だつて、本当にうれしそうに笑うから…。

「あーちゃん」

「あ、光輝くん」

「どっか行くの？」

「これからバイトなの」

「バイトかぁ大変だね」

「ううん、全然楽しいよ！他にやることないし、良い暇つぶしって感じ」

「そっかそっか」

「今からレコーディングでしょ？」

「そうなんだよーちよつと遅刻なんだけどね俺」

「はやく行かなきゃじゃん！」

「恭介怒ると怖いからな〜…じゃあ急いで行ってくるわ」

「いつてらっしや〜い」

光輝くんは恭介と同じバンドのメンバーでベースを弾いてる。なんていうか、結構適当な人間。

私は家の近所の喫茶店でバイトをしている。

自営業の喫茶店で、すごく雰囲気がいい。

だけど小さいし、目立たないところにあるから、お客さんはあんまり来ない。

暇すぎ忙しすぎず…そんなちょうどいい環境で私はもう2年近く働いている。

「あっちゃん暇かい？」

「そうですねー…お客さんいませんもんね」

「だよねえ…」

「でも良いですよね、ここの雰囲気。2年働いてますけど、飽きないですもん」

「そう言ってもらえるとすごく嬉しいねえ」

「常連のお客さんも、きっと私と同じ気持ちですよ」

店長さんは温厚なおじさんで、すごくふわふわしている。

店長さんの雰囲気もお店に負けないくらいに落ち着く。

「彼氏とはうまくいつてるのかい？」

「なんですかあいきなりー！うまくいつてますよ」

「そうかいそうかい。それは良かった」

「なんでですか？」

「いやね、この間恭介くんがお店に来てね、なんだか落ち込んでた様子だったから、あっちゃんとケンカでもしたんかと思ってね」

「…そうだったんですか」

恭介はたまに私の知らないところで落ち込んでいるらしい。

バンドでのことなのか、私でのことなのか、わからないから少しだけ苦しい。

恭介は自分から弱音を吐いたりしない性格だから、なおさら不安になる。

だけど私も、その不安を恭介に言えない性格だから、きっと恭介も不安なのかな…。

「いま、恭介たちレコーディング中なんですよ」

「ほう、新しいアルバム発売するのかい？」

「まだきつとずっと先の話ですけどね」

「でもこの間のシングルはすごく良かったよ」

「でも春にあの歌詞はちよつと…」

「でもあんな歌詞をあんなにポップに歌えるんだから、彼らはすごいよ」

店長さんは何かと恭介たちのバンドを気に入っていて、たまにお店でもかけてくれる。

お店の雰囲気にはあんまり合わない曲調だけど、構わずかけてくれるところ、店長さんの良いところだと思う。

「新しいアルバム出たら、私持つてきますね」

「じゃあ、またお店でかけようか」

「このお店にあのバンドは合わないですって」

「でも良い曲じゃないかー」

店長さんは優しくそんな顔で大きく笑った。

13時から始まったバイトは18時で終わり。

交代のバイトの子が来て、私は家へと向かった。

夕焼けが沈んで、あたりには薄紫の世界が広がっている。

「恭介たち、まだやってるのかな…」

いつもならこんなことはしないけど、私は彼らがレコーディングをしているスタジオに足を伸ばした。恭介たちがレコーディングしている姿って、いま思えば見たことない気がする。

少しだけドキドキしながら、いつか私もレコーディングするであろうスタジオに向かう。

小さなビルの地下にそのスタジオはあって、私は受付の人に言うて中に入れてもらった。

ドアについている窓から、中の様子をちらりと見てみる。

アットホームな空間を想像していたけど、そんな想像は一瞬で壊された。

みんなから何か冷たい空気が出ていた。ピリピリした雰囲気だ。

ここに居ちゃいけない、と、なぜかそのとき思った。

私は中に居るみんなに気づかれないようにその場を去った。

私、あんな場所で、うたなんてうたえないよ…！

「ただいま」

「お、おかえり……」

いつもと変わらない様子で恭介が帰ってきた。

今日のあの雰囲気は、彼らにとって当たり前の雰囲気なのかな。私には絶対に耐えられないような空気感だった。

「なしたの？」

「ん？うんなんなんもないよ？」

「そう？なんか変じゃない？」

「変じゃないよ？普通だよ？」

「ふうん、なら良いけど」

今日の私は極端に変だけど、こつこつ変化に恭介は気付くことができるのに、どうして私は恭介の小さな変化に気づけないんだろう……。

いつものように恭介と向かい合ってご飯を食べる。

昨日作りすぎてしまったシチューを食べる。

食べる。食べる。食べる。食べる……。

何も変わらない日常。

ただ少しだけ違う日常。

少しだけ不安な日常。

少しだけ億劫な日常。

世界中には私よりも大きな不安を抱えている人がいて、世界中には私よりも億劫な日常を過ごしている人がいる。そう思えば自分の気持ちなんてちっぽけに感じる。

なんてことは思えない。

私はどんなときだって私だし。

世界中の誰かはどんなときだって世界中の誰かではない。

私は世界中の誰かに何かをしてあげられないし、代わりにその不安を抱えてあげることもできない。

常に私は私自身の感情を抱えて生きている。

だからそれに大きさも高さも太さも偉さも強さも関係ない。

「俺ちよっただけ寝るわ。明日は朝早いし」

「雑誌の取材だったけ？」

「そうそう」

「ゆっくり休んで」

「うん、ありがと、おやすみ」

「おやすみ」

隣の部屋へ消えてゆく恭介の背中はやっぱりどう見たっていつもの恭介の背中ではしかなかった。

私は小さくため息をついて、今日のお昼にこっそり録画しておいた恭介たちのバンドが出ている番組を見た。

『今日のゲストはリグレットの恋人です』

静かな部屋に彼らのインタビューの音が小さく響く。

恭介のしゃべり声が聞こえる。いつもの恭介のしゃべり声が、聞こえる。

『下積み時期が長かったみなさんですが、どうですか？いまのインディーズシーンで最も注目されているバンドですよ？』

『いやー本当にありがたいですね』

『人気出てきたって実感するときと違ってありますか？』

『やっぱりライブやってるときですかね？最初の方は友達とかしか来てくれてなかったライブに、全然知らないお客さんも来てくれるようになって、あー俺たちもついにここまで来たのかー！って』

彼らは高校生のときからバンドを組んでいて、大学生になってから本格的に活動を始めた。

学校に行きながら曲を作って、ライブをして、ライブ会場でデモテープやらデモCDを無料でプレゼンとして、路上で弾き語ってみたりもしていた。

そうやってるうちにどんどん良い噂が広まって、友達の友達、そのまた友達ってどんどんリスナーが増えていって今に至る。

私は恭介と高校1年生の頃から付き合っている。
だからもう付き合って8年くらいになる。

同棲を始めたのは大学2年のころで、もう同棲して3年になる。
よく友達に「よく続くよね」なんて言われるけど、本当に自分でも
そう思う。

別に一緒に居なくてもいいんじゃないかって思ったこともたくさん
あったけど、だけどお互いに別れを選んだりしたことは無かった。
何か嫌なことがあっても別に何も思わなかったし、何か悲しいこと
があってもまあこんなもんかって思っていた。

恭介もきつと同じ気持ちで、恭介もきつと私と同じ考えなんだって
思ってたし、今もずっと思っている。

「あきほ？寝ないの？」

ゆっくりと開くドアから寝むそうな顔をした恭介が私に聞いた。

「あ、うん、そろそろ寝ようかな」

「なに見てたの？」

「お昼に録画してた番組」

「あ、これ俺ら出てるやつじゃん」

「そうだよ、バッチリ録画したんだから」

「ふうん、別にいいのに」

恭介は寝起きが悪い。それに加えて眠いときには機嫌が悪い。
私は寝るしたくをして、恭介の隣でそつと眠りについた。

恭介は今日も私に背中を向けて寝る。
私はそんな恭介の背中を眺めながら眠った。

私に向けられた恭介の背中はいつもの恭介の背中で、なんの変化もない。

この背中に不安や悲しみが抱かれたとき、私は恭介に何をしてあげられるだろう。

今まで私は、恭介に何をしてあげられていたのだろう。

恭介は私と付き合っていて楽しいのかな？

恭介は私と付き合っていて嬉しいのかな？

恭介は私と付き合っていて助かったかな？

恭介は私と付き合っていることに後悔したことはないのかな？

「いってきまゝす」

「いってらっしゃい」

恭介は今日は雑誌の取材の日。

私は恭介を見送った後に近くの本屋さんへ向かった。

晴れわたる空とあたたかい太陽。

春色のチュニツクにショートパンツを履いて出かける。

「いい天気だなあ」

今日の天気みたいに、私の心の中のもやもやも晴れわたれば良いの
になあ。

本屋さんまでの道をゆつくりと歩く。

街は出勤や通学の人で溢れかえっている。

24歳の私は、ちゃんとした職もなく、アルバイトの生活。

同棲を始めたとき、恭介は「無理に働かなくてもいいよ。俺が頑張
って幸せにするから」って言ってくれた。

それはプロポーズの言葉みたいで、そのときの私は彼からの本気の
プロポーズを夢見ていた。

だけどそれは私のただの妄想にすぎなくて、恭介はそれ以来、何も
言わなくなった。

「すきだよ」とも「あいしてるよ」とも言わない。

「幸せにするよ」って言葉も、もう忘れちゃったのかな？

たくさんの本が並ぶ本屋の中で、私は音楽コーナーへと向かった。たくさんのジャンルの音楽雑誌が並んでいる中、リグレットの恋人のインタビュアーが載っている雑誌を買い占める。

これが私の月1の習慣である。

中くらいの紙袋に4冊の音楽雑誌を詰め込んで、私は家へと戻る。

雑誌というのは結構重たいもので、寄り道しようなんて気もなくなってきたしまう。

「あーちゃん？」

「…みき？」

家に帰る途中で、大学時代の友達である美紀に逢った。美紀に会うのは大学卒業以来で、なんだか懐かしい気もしたし、初めて会うみたいない気分にもなった。

「あーちゃん変わらないね！」

「みきはずいぶん変ったね。すっかり社会人じゃない？」

「やだな〜みんなそんなもんだよ？」

「私はフリーターだからなあ…」

「でも恭介くんとまだ付き合ってるんでしょ？」

「うん、そうなんだけど…」

「恭介くんたちのバンド、いま人気あるじゃん！」

「なんか、本当にこんなに有名になるなんて思ってなかったからびっくりだよ」

「でも私すきだよ？恭介くんたちの曲！人気にならない方がおかしいよ！」

「ははっ、恭介に言ったら喜ぶよ」

アマチュアのバンドはみんな同じような道を歩んでいる。

どんなに良い曲を作ったって、認めてもらえなきゃ上には上れない。メジャーデビューして今じゃ超人気バンドも、インディーズシーンで活躍している有名バンドも、そしてリグレットの恋人だって同じだった。

どんなに友達に「良い曲だね」なんて言われても、それで終わって

しまつては上には上れない。
たくさんの人に聴いてもらつて、たくさんの人に「良い曲だね」つて言われないと上には上れないんだ。

高校生のころ、初めて恭介が作った曲を私は今でも覚えている。
デモテープにもデモCDにもCDショップに売っているCDにも収録されていない、彼が初めて作った曲。

私はたまにその曲を思い出す。メロディも歌詞も恭介の歌声も思い出す。

そのときの風景も思い出す。そしてその頃に戻りたいと思う。
あの頃に戻れたらつて思つてしまう。

これつて、結構危ないかな？

私は今の恭介の曲をどんな気持ちで聴いていて、今の恭介の姿をどんな気持ちで見ているのだろう。

そして恭介は今、どんな気持ちで曲を書いているのだろう。

久しぶりに会った美紀と別れて、私は家に帰る。

「ただいま」

しんとした部屋。なんだか切なくなる。

買ってきた雑誌を広げて、リグレットの恋人の記事だけをじっくり読む。

恭介がどんな態度で、どんな口調で、どんな姿でインタビューに答えているのかがなんとなく想像できる。

私はそれくらい恭介のそばにいる。

できればこれからも恭介のそばにいたいな……。

「ただいま」

たくさんのお音楽雑誌を広げたまま、私は夕焼け色に染まる部屋で眠ってしまったっていたみたいだった。

「あきほ？これ全部買ったの？」

「え？あ……うん……」

「こんなに買わなくてもいいのに」

「買ったかったの……」

「ふうん」

いつもの恭介。
いつもの姿。
いつものしぐさ。

だけど、それが切ない。

「恭介…私と付き合ってたて楽しい？」

「え？」

「私と付き合ってたて嬉しい？私と付き合ってたて助かった？」

「あきほ、どうしたのさ？」

「私と付き合ってたこと…後悔してない？」

少しだけうつむく恭介の顔が涙でゆがんだ。
どんな答えが返ってくるのか、不安だった。
こんな風に自分の気持ちを恭介にぶつけたことは初めてだったから、
なんだか恥ずかしくて、怖くて、不安で、言わなきゃよかったって
後悔した。

私は恭介がすき。

恭介の変化に気づいてあげられないかもしれないけど、恭介のこと
支えてあげられないかもしれないけど、だけど私は恭介がすき。

恭介に気づかれないように小さく心の中で叫んだ。
うつむいていた恭介の顔が私の方を向く。

「後悔してないよ」

「後悔、してないよ」

「本当に…?」

「どうしたのさ?急に!こんなこと言うの初めてだね」

「うん…ずっと、不安だった」

「そうだったの?」

「うん…」

「…俺も不安だった」

「え?」

「バンドのこともあきほのことも」

いつも通りだと思っていた恭介の背中にはたくさん不安が詰まっていた。

あまりにも長い期間、不安が詰まっていたから、私はその不安の背中をいつも通りの背中だと思ってしまっていたのかもしれない。

恭介のことがすき。

恭介のことをあいしてる。

不安も恐怖も何もかも全部取り除いてあげたいけど、恭介の抱える気持ちは恭介だけのもので、それを私が代わりに抱えてあげることができない。

だけどその気持ちを、一緒に分かち合うことや、消化する手助けをすることは私にもできる気がする。

「恭介、すきだよ？」

「うん、俺もすきだよ」

「恭介、私、ずっとそばにいるよ」

「うん、ずっとそばにいて…」

私の肩にもたれる恭介の声が少しだけ震える。

私は小さく恭介を抱きしめた。

私はふと恭介が初めて作った曲を思い出した。

そのときの恭介の姿も表情も歌声も全部。

もうあの頃に戻りたいなんて思わない。

私は今の恭介と一緒にいたい。

そう、思えた。

僕が今まで過ごしてきた中で生まれた後悔も
僕の大切な恋人だから僕は君を大切にするよ
そしてその後悔の恋人を僕は幸せにする

そう約束するよ

あとがき

新しい生活に飛び込んだとき、ふと昔のことを思い出します。

幼稚園のころの恋、小学校のころの恋、中学校のころの恋、高校生のころの恋、そして今の恋。

それぞれの自分はそれぞれの感情を抱いていて、それぞれの自分はそれぞれの恋をしていた。

そんなことを考えたら、たくさんのストーリーが頭の中に溢れました。

私がしたことがある恋愛もあり、したことのない恋愛もあります。

だけど、この小説に出てくる男の子たちは全部私のタイプの男の子です（笑）

気付いた方もいると思いますが、この短編ストーリーは実は小さくつながっているのです。

あのとき出てきた人物が、このストーリーでは主役：みたいな感じで登場してきているので、ぜひ探してみてください。

春になると、恋がしたくなる。

あたたかい陽だまりのような人に触れたくなる。

そして胸の中をたくさんときめきでいっぱいにしたくなる。

私は今、そんな気持ちを抱えています。

あなたは今、どんな気持ちを抱えていますか？

その気持ちはあなただけのものです。

私はそう思います。

だから、その気持ちを大切にしてください。
後悔もすべてあなたの恋人です。

最後まで読んでくださって、本当にありがとうございます。
とても、とても感謝しています。
あなたの心に、この作品の、小さな場面のひとつが、残ってくれる
ことを願っています。

ありがとうございました。

2010・05・13 ありまうたこ

(この作品は2010年5月に魔法のいらんどにて掲載した作品と
同じものです)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2398t/>

やっぱり、寂しかった

2011年10月9日02時43分発行